

かわせみ通信

発行：神奈川県自然環境保全センター
自然保護課

住所：神奈川県厚木市七沢657

TEL：046-248-6682

野外施設自然情報

バックナンバーは
HPから見られます→



自然環境保全センターの野外施設では、それぞれの季節に、生き物同士の巧みなつながりや、興味深い生命活動など、大自然の不思議な現象にふれることができます。この「かわせみ通信」では、野外施設の出来事や生き物たちの様子を紹介しています。

野外施設トピックス

| 場所 | できごと |
|------|--|
| Y8付近 | 池の土留めやグレーチング道を補修しました。 |
| 園内全域 | 2/8 積雪のため休園。8年ぶりにしっかり積もって一面の銀世界でした。(右写真) |
| Y9付近 | 2/14 ヤマアカガエルの産卵初認。 |
| 園内全域 | 3/1 ウグイスのさえずり初認。 |



谷戸が銀世界に...

ホオジロの仲間を見よう

冬の自然観察園を代表する野鳥といえば何を思い浮かべるでしょう？きれいなブルーのルリビタキやオレンジ色のジョウビタキ、真っ白なダイサギなど、さまざまな鳥があげられると思います。そんな中で今回は、ホオジロの仲間4種を紹介します。冬の自然観察園の常連で、来園者からの人気が高い鳥もいます。

留鳥のホオジロは春のさえずりが印象的ですが、冬も本館から自然観察園へ向かう道路沿いのほ場や電線にいるのがよく見られます。

冬鳥のカシラダカやアオジは、ヨシなど湿地の草地でみられることが多いです。

クロジも冬に自然観察園にやってきます。暗い林を好み、沢沿いの林床やササやぶの中で見られます。

いずれもスズメくらいの大きさで、なんとなく似ていますが、特徴を覚えれば、高確率で自然観察園で出会うことができ判別できるようになります。(※アオジとクロジのメスはよく似ていて判断に悩むときがあります。)

草むらややぶの中で「チッ、チッ」「チチッ」という声が聞こえたら、ぜひ彼らを探してみてください。



ホオジロ



カシラダカ



クロジ(オス)



アオジ(オス)

シダ初心者でもわかるシダ植物

寒さで草木が葉を落とす中、常緑樹や一部のシダ植物は元気に葉を茂らせています。冬の時期にシダ植物に目を向けてみませんか。シダ植物は似た形の葉を持つものが多く、種子植物では識別点の一つである花がありません。見分けることが難しく感じてしまいますが、ちょっとした特徴を覚えれば簡単にわかるシダ植物もあります。

ではシダ植物とはどんな植物でしょうか。種子植物と大きく違う部分は子孫を残す方法にあります。種子植物は花を咲かせて種子を作りますが、シダ植物は胞子を飛ばすことで子孫を残します。胞子が育つと前葉体というハート型の姿になり、ここで作られた精子と卵が受精し、胞子体という皆さんが目にするシダに成長します。

シダ植物（胞子体）のからだのつくりを見てみましょう。葉と茎と根から成り立っています。地上の緑色の部分が葉で葉身と葉柄からなり、茎は地中を這うものや地面ぎりぎりに位置しているものが多く、根茎と言います(右写真参照)。この葉が見分けるポイントになります。

今回はセンターで見られるシダ植物の中でも①葉の大きいシダ、②よく見られるシダ、③つる性のシダを紹介します。



シダの各部分の名前 (ヤブソテツ)

①葉の大きいシダ

※シルエットは実物大です。

羽片が長さ25cm前後と大型のもの。林の中でも目立ちます。

一枚の葉が60cmを超えるもの。

イワガネゼンマイ



葉の裏
葉脈は枝分かれし網目状にならない。葉脈上に胞子が並ぶ。

イワガネゼンマイ

イワガネソウ



葉の裏
葉脈が網目状になる。葉脈上に胞子が並ぶ。

イワガネソウ

リュウメンシダ



葉は明るい緑色で紙質、裏も表も同じように見える。

②よく見られるシダ

林内、日の当たる石垣などでもよく見ることができます。

そっくりさんに
気を付けて!

オオバノイノモトソウ



葉を混み合せて付ける。光合成をする栄養葉と胞子をつける胞子葉に分かれる。



イノモトソウ

林内でも日当たりのよいところに生育する。オオバノイノモトソウによく似るが、上部の葉軸には翼がある。自然観察園では数が少ない。



③つる性のシダ

他の植物などに巻き付きます。
カニクサ



1枚の葉がつる状になってほかのものに巻き付く。葉の上部に胞子をつける。
(右写真のカニクサは長さ295cm)



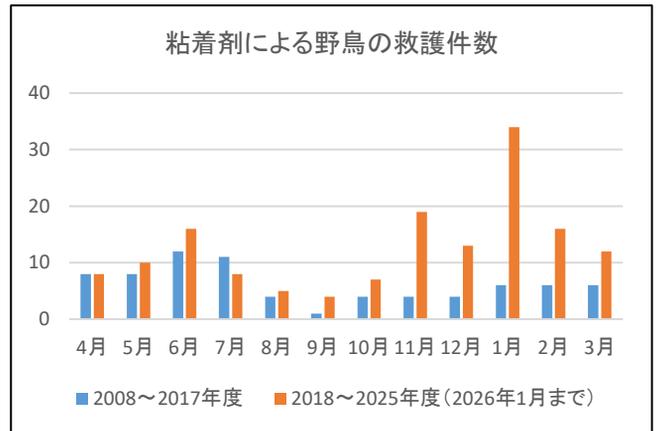


傷病鳥獣救護の業務として、県民の方により持ち込まれた県内の傷ついたり弱ったりした野生動物（鳥類と哺乳類の一部）を收容し、必要に応じて治療や野生に戻すことを目標にリハビリを行っていて、そうした野生動物の「救護原因」や「リハビリ状況」などの情報をこの「かわせみ通信」に掲載しています。

粘着剤による被害急増！？

2月、自然環境保全センターの救護施設では鳥獣の受入れ数が上限に達し、新規受け入れを一時休止する事態になりました。このとき、特に目立ったのは、ネズミ捕りシートなどの粘着剤にかかり動けなくなった野鳥の持ち込みでした。

粘着剤については、これまでも度々かわせみ通信やXなどで啓発を行ってきました。（かわせみ通信第17号、24号参照）しかし、被害はなかなか減らず、むしろ増加しています。これまでは野鳥の繁殖時期である5～7月に救護件数が増える傾向でしたが、最近は年間を通して受入れがあります。



1月にはスズメやメジロなど、一度に9羽が同じ粘着剤にかかり搬送されてきました。庭でスズメに餌やりをしていたら、その餌を狙ってネズミが出るようになったため、ネズミ捕りシートを設置したところ、大量の野鳥がかかってしまったそうです。小さな鳥は体力を消耗するのがはやく、粘着剤を無理に剥がそうとすると骨折などの重傷にもつながりやすく、命にかかります。9羽中、放野できたのは1羽でした。

また、粘着剤にかかったネズミや虫を食べようとして猛禽類などがかかってしまうケースが度々あります。大型の鳥であっても羽に粘着剤がついてしまうと羽の構造が壊れて飛翔に影響が出てしまうことがあるため、深刻な問題です。12月に持ち込まれたフクロウは、粘着剤から外すために風切羽と呼ばれる飛ぶための羽が切断されていました。体は元気でも野生復帰するには、新しい羽に生え変わる換羽の時期を待たなくてはなりません。換羽は鳥の種類などによって異なりますが、大型の鳥の場合は夏から秋頃の年に1回です。このフクロウも新しい羽がうまく生えてくるか、現在経過観察中です。

粘着剤により羽が損傷してしまうと、飼育期間が長くなる分、より動物にストレスがかかります。飼育スペースも空かないため、新たな傷病動物を受け入れることもできなくなってしまいます。

メジロ(1月22日受入れ)



羽が抜けたり、粘着剤が残ったりして、羽毛(ダウン層)の保温機能が失われています。

フクロウ(12月7日受入れ)



体はきれいになり一見飛べそうですが、翼の羽の先半分ほどが切断されているため、飛ぶための推進力が得られず、飛べません。フクロウは羽音を立てずに飛んで狩りをして、ネズミなどの小動物を食べて生きているため、この状態では野生復帰はできません。

また、最近はSNSなどの情報から、油で粘着剤を溶かした状態で持ち込まれるケースも多くなっています。しかし、そのほとんどは適切に処置されておらず、かえってダメージを与えている場合が多いです。油は素早く粘着剤から剥がすことはできませんが、その後の油のすすぎが不十分だと、本来ふんわりと空気を含んで体温を維持する働きをする羽毛（ダウン層）が機能せず、水をはじいたり、体温を保つことができなくなってしまいます。低体温になるだけでなく、その状態で温めようとすると逆にやけどのような状態にもなってしまいます。



小麦粉で粘着が広がらないようにした様子

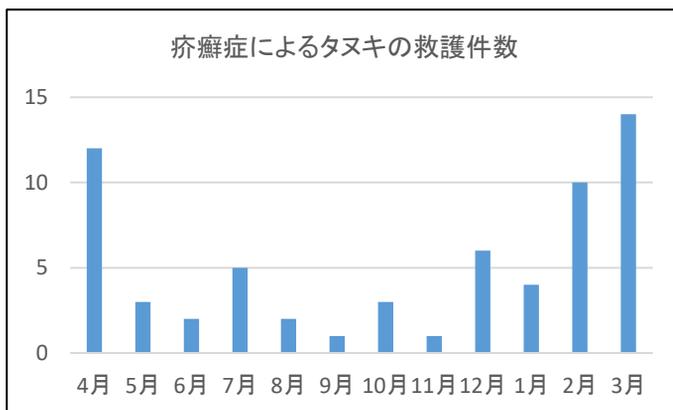
当センターでは、基本的に粘着剤から剥がす際にはまず小麦粉を使用して、ゆっくり根気強く処置をしています。県民からの問い合わせに対しても、写真のように小麦粉など食品用の粉をまぶしてこれ以上接着しないように応急処置をしたうえで、救護施設に相談し、無理に剥がさずに搬送することをお願いしています。

しかし、なによりも大切なのは粘着剤にかかってしまう被害自体を減らすことです。粘着剤を野外で使用することはネズミ以外の野生動物にとってとても危険なものであるということをもっと多くの人に認識してもらうことがその第一歩ではないかと思えます。日頃から身近な自然にほんの少し関心を持って、自分の身の回りにどんな動物がいるのか、どんな行動をしているのか観察してみてください。身近な動物たちの存在を知ったうえで、粘着剤を置いたらどうなるか…と想像を巡らせることができれば、被害を減らせるのではないのでしょうか。

タヌキの疥癬症

当センターに救護される哺乳類はタヌキがほとんどですが、その保護原因として交通事故が続いて多いのが、疥癬症です。近年の記録では冬から春先にかけて救護数が増える傾向です。

疥癬症は、ヒゼンダニという目に見えないサイズのダニが皮膚に寄生し、皮膚内を食い荒らすことで毛が抜け、皮膚が痂癩化（分厚くかさかさした状態）します。全身が痒みの症状が出てきて、体を掻く行為で傷もできます。結果的に寒さによって低体温症や栄養失調になってしまうことも多いです。



2019年度～2024年度の記録

疥癬がタヌキに多い要因としては、諸説ありますが、ノラネコなどへの餌付けが主な要因として考えられています。野外にエサを出しっぱなしにしておくと、タヌキやネズミ、カラスなどの野生動物が食べにくることがあり、そこに行けば簡単に食べ物を得られると学習していきます。同じ場所に頻繁に集まり、接触する機会が増えることが病気の蔓延につながる要因のひとつと考えられます。



ヒゼンダニ



疥癬症のタヌキ

救護されたタヌキは、寄生虫を落とすための薬を数回に分けて投与して治療を行います。脱水症状や低体温などで弱っていることが多いため、全身の状態を確認しながら、世話をしています。また、ほかの動物への感染を防ぐため別室に隔離し、使った器具を熱湯消毒するなど、感染対策にも注意をしています。

疥癬症の蔓延を少しでも防ぐために、もしネコに外でエサを与える場合は、食べ終わったらその都度片付けることで、他の動物を引き寄せられるのを防ぐことができるかもしれません。野生動物はペットとはちがいで、自然の中でさまざまな生き物と関わり合って生きています。適切な距離感を保つことが必要です。